
特高特科

剣先

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特高特科

【Nコード】

N7693X

【作者名】

剣先

【あらすじ】

総府西高校には飛び抜けた人材が集められている。勉強、スポーツ、美術……。その中でも特科と呼ばれ、周囲からは畏怖の念を抱かれているクラスがあった。そのクラスとは……？

総府新聞をみて

総府西高校は、『飛び抜けたものを持つ者のみに入学を許可する』
という一風変わった入学基準を持つ、全寮制の私立高校である。

創立以来、文系科目が得意な1組、理系科目が得意な2組、スポーツ科目が得意な3組、芸術科目が得意な4組と、各々に合ったクラス編成でそれぞれに合った授業を受けさせることを売りにして、社会に有益な人材を排出し続け、その生徒数を伸ばしてきた。

卒業生には国の最高学府卒の科学者や政治家、オリンピックの金メダリストや、ルーブル美術館に絵を飾られている画家など、そうそうたるメンツがいる。

そんな総府西に数年前、突如新クラスが設立された。飛び抜けた人材をより幅広く集めたいという学長の意向が反映され、周囲の反対を押し切る形で無理やり作られたそうである。

なんで『飛び抜けた人材』を集めるのに周囲が反対する必要があったのかって？

答えは簡単だ。ネガティブな方面に飛び抜けていたからである。その案が可決された時の職員会議は凄まじく荒れて、『あの聡明な校長がトチ狂ってしまった』と涙を流した教師までいたという。

5組 すげーバカ

6組 エスパイ

「バカはまだいいとして、エスパイってなんですか・・・。」
可決されたその後頭先生は屋上で夕日を見つめて、悔しそうに歯ぎしりしながらそう呟いたという。

バカは中学側からの推薦と総府西側の審査によって、厳しく厳選されていた。厳選に携わった審査員はなんでこんなにも労力と予

算をかけて、いちいちバカを厳選しなければならぬのかと血の涙を流した。

しかし世界にバカは人数もタイプも星の数ほど存在し、その選抜は優秀な人材の時ほど簡単にはいかなかった。全く皮肉なものである。それ以上に難航を極めたのがエスパーの徴集である。皆さんはエスパーと言えば、念動力や、時間移動など派手で有益な能力を想像することだろう。しかしそんなものはどこにも居なかった。それを名乗る奴らは大体トリックがある偽物で、本物と言えば指がちよつとだけ伸びるように見えるとか、腸内のビフィズス菌を恐ろしいほど活性化させるなどといった、地味なものばかりであった。はつきり言って『エスパー砂糖』という無理をするオジサンの方が100倍ぐらい凄い。

このように厳選に手間取る賛成派の様子を、反対派は指をくわえて見ているなどということはしなかった。一転反撃に向けた動きを見せる。その勢いは凄まじく、最終的にデモにまで発展することになる。『ろくなエスパーが居ないのに、エスパークラスを作る必要が何処にあるというのですか！』という教頭の心の叫びは万人の心を動かしたという。

想像以上の質の低さもあり、さすがに校長もある程度相手の要求を飲まざるを得なくなり、早急に和解に向けた話し合いの席が設けられた。その結果、勢い余ってデモを始めてしまったものの面倒なので今すぐ中止したいという反対勢力と、想像以上にエスパーがシヨボくてやる気をなくした校長との思惑が合致し、両者折れる形で適当な場所に落とすところを見つucker事となる。

5組 バカでエスパー

特別な高校と言う意味で『特高』と呼ばれる我々の中でもなお特

別な存在。所謂今の5組、『特高特科』のことである。

「あの時はどうかしていた。もしかしたら、デモに興奮していたのかもしれない。なんで賛成派も反対派も得しないクラスを作ってしまったんだろう……。」

個人情報保護のために名は伏せさせて貰うが、ベテラン教師であるAは後に無念そうにそう呟いていたという。

「あの時はどうかしていた。他の奴らに言われてやめたみたいで悔しいから意地になっていたが、冷静になればバカなクラスもエスパーのクラスも必要ないと言うのに、バカでエスパーのクラスを作ってしまうなんて。」

個人情報保護のために名は伏せさせて貰うが、校長であるYは後に無念そうにそう呟いていたという。

こうして誰にも望まれずに、最高位の高校に最低のクラスが誕生した。

*

「ちよつと、みんな！！これ見てよ！！！」

僕は掲示板に張り付けられた新聞を読んで、大声をあげる。それを聞きつけてクラスメイト達がゾロゾロと集まってくる。大声がする方集まるといふバカの習性を利用してもらった。こいつらはさしずめ光に集まる昆虫みたいなもんだ。

「なによ、直樹。大きな声出しちゃってさ。まるでバカみたいじゃない。」

ショートカットに気の強そうなツリ目が特徴的なこいつの名前は瀬島由美子。すらつと伸びた白い足は本当に綺麗だし、顔だって悪くない。欠点さえなければ結構モテていると思う。ちなみにその欠点とはバカなことだ。

「……そうよ。直樹。」

この口数の少ない大人しそうな女の子は御影瑞穂。スタイル抜群

で容姿端麗。学年でも5本の指に入る美女。こんなおっとりしているのに実はDSなんだ。そのギャップがいいなんていう人もいて一部ではカルト的な人気を誇っているみたい。欠点はバカなことかな。「2人の言うとおりだ。お前みたいな奴が我ら5組の評判を落としているんだ。これでは僕までバカだと思われてしまうではないか。」

この委員長でもやっていそうな小柄でメガネの男は、前田洋平。実はすごく勉強ができる。欠点はバカなこと。さっき勉強ができると言ったばかりじゃないかだって？心配しなくてもいい。彼は人間としてすごく馬鹿なんだ。僕たちのクラスはバカの種類だけは選り取りみどり。ネジ工場の嫡男として生を受けた彼は、幼い頃から近所のスーパーで試食を食い荒らし勇猛を轟かせていたという。彼のテリトリーでは出現と共に、コストの高い刺身や肉から順々に撤収させるといふ鉄の掟が築かれたほどである。

「ちよつと、みんな！そんな場合じゃないんだよ。この新聞を見てよ！」

僕はいきなり罵ってくる級友達を無視して掲示板から新聞をむしり取り、みんなに見せようとする。

「どれどれ！？」

不意に背後からゴツゴツした汚らしい手が伸びてきて、僕の手から新聞を奪い取る。

「あつ、智！さっきまで何やってたんだよ！！掃除を僕に押し付けて消えちゃって！！」

この一見クソビッチに見える金髪のこの男は松野智。こいつの事を簡単に説明するならクソビッチって言っとけば事足りると思う。男らしい顔立ちに強い腕っ節にモノを言わせ、女の子と遊びまくっているという噂が立つ、モテない男子の敵である。喧嘩だけだったら3組の奴らにだって負けてなくて、中学までは空手の全国大会でブイブイ言わしていたらしい。僕の相棒みたいなもんかな？もちろん欠点はバカなこと。なにしろ月の仕送り三万円のうち2万円をモバゲーに課金する豪のものだ。更にそこから月々の交遊費とジャン

ブ代が差し引かれるため生活費にとして使える額は限りなくゼロに近づく。その為毎食100円均一の蕎麦を湯掻いて食べている。決してうどんに手を出さないその姿に、周囲からは『誇り高き蕎麦食主義者』『ソバタリアン』と呼ばれ恐れられている。そんな努力の甲斐もあり彼は豊富な漫画の知識を持ち、そしてアバターには光り輝く羽が生えている。

僕は掃除をバツクれたことに対し彼に痛烈に避難を浴びせるが、智はどこ吹く風で新聞に目を通してしている。

「……………最高位の高校に最低位のクラスが誕生した、だと……………面白い。面白いことを言うじゃねえか。」
新聞を読み終えた智は、プルプルと震えながら洋平に新聞を押し付ける。その新聞にみんなが群がってくる。それを見て洋平は皆にも聞こえるように音読を始める。

洋平も意外に皆に気を使えるんだ。てつきり1人だけで読み始めるかと思つたよ。

僕は普通に考えれば当たり前な事をしているだけなのに、何故だか洋平に感心してしまった。普段からの行いが悪いところいう時に得だよな。

「。たし生誕がスラクの位低最に校……………」
由美子が洋平の肩を揺さぶる。

「ちよつと洋平、新聞が逆向きなんだけど。」

洋平は全く気にする素振りもなく慥然とした表情のまま黙々と読み進める。

「誰にも望まれず最低のクラスが誕生しただと!!」
読み終わると洋平は目を見開いて咆哮した。

「逆から読んで理解できるのはあんただけよ!!」
「僕の関心を返してよ!!!」

「直樹! あんたはうるさい! 大声を出さないで!!」

由美子は僕を睨みつけると、怒りにプルプルと震える洋平の手から、冷静に新聞を取り上げ、御影さんにも見えるようにして読み始

める。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

気のせいだろうか。段々と新聞を持つ由美子の手に力が入っているように見えるのは。ほら、新聞の端もちぎれ始めているじゃないか。なんだか嫌な予感がしてきた。

「直樹。」

「ハイ！」

僕はさつきから嫌な予感を感じているということもあり、余計な因縁をつけられたら嫌なので、大きな声で返事をする。

「あなたの能力を使いなさい。」

「えっ、でも・・・」

「直樹。あなたの能力を使いなさい。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ハイ。」

由美子に凄まれて僕は渋々その新聞の上に手を置く。僕の手から淡い光が漏れ出す。僕達5組の生徒には皆生まれ持つて超能力が備わっているのだ。僕の能力は擬人化。僕が手を触れて念じるだけで物に生命を吹き込むことができるのだ。まあ吹き込んだところであんまり利益はないのだけど・・・。

ゆつくりと光量が低くなり、やがておさまる。するとそこには貧相な短パンを履いたミニチュアサイズのオジサンが鼻糞をほじりながら横になって新聞を読んでいた。げっそりとやせ細ったそいつは、古新聞みたいにくすんだ色をしている。我ながら、なんて花がない奴に擬人化してしまったのだろう。僕は自分のイメージーション能力を残念に思った。

まあおじさん以外には擬人化できないんだから意味ないか。むしろ華のあるおじさんなど逆に気持ち悪い。

「ちよつと、あなた！この記事を書いた人が誰なのか教えて。」

由美子はそうとうご立腹な様子で、新聞のオジサンに話しかける。オジサンよ、くれぐれも由美子に生意気なことは言わないでくれよ。うるせえなあ。こっちはアンタ達についてのくだらない記事を書

かれてショックを受けているんだよ。」

ああ、早速生意気なこと言ってくれちゃってるよ。冷や汗がジワジワ滲み出る。

「俺はこれに人生かかってたんだよ、わかる？これから一生涯バカについての記事を背中に背負って生きなきゃいけない奴の気持ちを考えてもみてくれよ。少しは紙権を尊重して欲しいもんだぜ、全くそれよりお嬢ちゃん達可愛いね。パンツ見せ……。」

バン！！！！！！

御影さんがオジサンを手のひらで潰した。

「ぎゃあああああああああああ！」

悲鳴を上げたのはオジサンではなく僕であった。

この能力には欠点がある。僕が擬人化しているときに擬人化したキャラを攻撃されると、そのダメージは僕にフィードバックされるのである。だからさつきも僕は擬人化させることに躊躇いを感じていたんだ。だってこんなに気が立ったみんなを前にそんなことするのは自殺行為みたいなもんだろ。

僕は痛さのあまりのたうち回る。全身の毛細血管が破裂したような気がするが僕の命は大丈夫なのか？

「……私のパンツが見たいなら自分の大切なものを見せてから。」

ちよつと御影さん？言ってることが少々ずれてるんだけど。

智がそんな僕らのやりとりを見て口を開く。

「こんなおじさんに聞かなくなつて書いたやつくらいわかるぞ。学校の新聞を書いているのは文系クラスの1組なんだから1組の奴等に決まっている。」

「ちよつと智！なんで早く言わないのさ！！オジサンの潰され損じやないか！！！」

「直樹うるさい。確かに新聞部は1組の生徒で構成されているんだから1組に決まっているわね。よし。今から乗り込んで文句を言いに行くわよ。」

「……………そうね。縛りあげて謝らせてあげる。」

御影さん。とりあえず涎を拭きなよ。あと何で笑ってるの？僕はSオーラをムンムンと漂わせ始めた御影さんを見てブルリと体を震わせた。

けど由美子と御影さんの言つとおりだ。こんな記事を書かれて黙っているわけにはいかない。

「うん！僕だつてあいつ等のせいで全身の血管を破裂させられる羽目になったんだ。許せないよ。智だつてそうだろ？」

「ああ。アイツら一度ギタンギタンにしてやらないとな！」

智はそう言いながら、手をボキボキと鳴らしている。

「よし！じゃあ決まり！今から1組に乗り込んでとつちめてやろう
！！！！皆準備はいいか　！！！！」

「おお！！！！！！」

「コレは聖戦である！！！！我らをバカにした1組を許すな！！」

「おお！！！！！！」

「情けは無用！女・子供関係なく根絶やしにするんだ！！！！」

「おお！！！！！！」

「ちよつとまった！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

不意に円陣を組んで手を重ね合わせる僕らの後ろから叫び声が聞こえた。皆一斉にそちらを向く。そこには先程までむつつりと黙り込んでいた洋平が両腕を組んで佇んでいた。

「どうした洋平。早くお前もこの円陣に加われよ。これから厳しい戦いになる。決意を固めておこつ。」

智が雄々しく叫びかける。

「……………は……………と……………る。」

洋平は今なんて言っただ？ボソボソ話すもんだから聞こえにくい。
「ん！？」

僕達は一斉に聞き返す。

「僕は五時から『プチつとメイド天使』が始まるから帰る。」

少々の時を沈黙が支配する。

なんだかやる気がなくなったので、マホドナルドによってハンバーガーを食って僕らも帰った。

これは一組みの仕掛けた巧妙な罠である。

「あつははははは！なんで霧を主食にしてまで仙人になろうと思っ
たんだよ！！あー、おかしい。あれ、今何時だ？」

僕はふとテレビから視線を外し、壁に掛けた時計に目をやった。
気味の悪いカエルのようなキャラクターの形に型どられたそいつは、
憎らしい顔で時を刻み続けている。

「もう1時……。学校から帰ってきて8時間もたったのか。それ
にしても今日の1組の新聞にはムカついたな。根も葉もないことを
書きやがって。まいあいや。もうすこしテレビを見たら寝よつと

「そう思い直し、コミカルな仙人のドキュメンタリー番組に視線を
戻した。しかし、仙人と守銭奴と化した坊さんが口論を繰り広げる
シーンを見ていたら、どういう訳かわからないが、次第に僕の心の
中に1組の連中への嫌悪感がムクムクと湧き上がり抑えきれなくな
ってきた。

「あー、もうむかつく。なんで部屋に戻ってまでイライラしなきゃ
いけないんだよ。そうだ！風呂にでも入ってスッキリしてこよつと

「ここ総府西高校の僚には豪華な大浴場がついている。そこのス
ーパー銭湯と比較しても遜色のないその風呂は、源泉かけ流しの天
然温泉だ。なんでも学校を建てるときに偶然掘り当てた際、ど
うせなら大浴場を作っちゃおうという学長の思いつきで作られたら
しい。

僕は我ながら名案であると思い、テンション高めに着替えとタオ
ルを用意すると、ズンズンと風呂場へ歩いていった。夜の廊下は、
みんなが寝静まっているためかとても静かで、風呂の前にたどり着
くまで誰ともすれ違わなかった。

「おっ、もしかして貸切じゃないのか！？ってあれ！？サンダルが

ひとつ置いてあるや。まあ一人ぐらい入ってもなんの問題もないさ。でも誰だろうこんな時間に？」

そう気を取り直して更衣室に入ると、まず僕の目に飛び込んできたのはTシャツだった。

なんで入口に落ちてるんだろう。誰かが帰るときに落としていたのかな？

次に目に映ったのはズボン。それから靴下、ブリーフと順々に浴場への入口に向かって脱ぎ散らかしてある。

この散乱する衣類の持ち主は、脱ぎながら更衣室を浴場へと縦断していったのか。なんて辛抱のない奴だ。どうしてかわからないけど、見る前から誰が風呂に入ってるのか分かってしまった気がするよ。てか、せめてブリーフの捻じれだけはなおしておいて欲しかった。だってこれを見るとすごく不愉快な気持ちになるんだもん。

僕は脱衣した自らの服をカゴに捻り込むと、脱ぎ散らかされた捻れブリーフを踏まないように最新の注意を払い、浴場の入口まで歩いていく。そして不快感に任せて勢い良く、バン、と扉を開け放つ。案の定というか、やはりというか、中には智がいた。予想外だったのは彼が背泳ぎをしていたことぐらいである。僕はその局部をまざまざと見せつけられ気持ち悪さのあまり昏倒しそうになる。せめて背面を上空に向ける泳法を選択していて欲しかった。だって尻を見せられるのと、ちこを見せられるのじゃあ僕の心に負うダメージが違うだろ！？

「おい！危ないぞ！！風呂での立ち眩は危険だから気をつけるよ？頭でも打ってこれ以上バカになったら大変なんだから。」

不快感に足元がぐらついた僕を、智は急いで風呂から飛び出し抱きかかえる。お願いだから僕に触らないでもらえるかな？余計に足にきちゃうじゃないか。

「ちよつとやめてよ、智！僕は男の子で或ことを諦めてないし、女の子のことが好きなんだ。あつ、男の娘と書く方じゃないからね！」

「おい暴れるな、タツカン！つておわつ！！！」

こいつは僕の苗字の高山から『タツカン』と僕のことを呼ぶ。

気持ちの悪い声をだして智が僕の上に倒れかかる。僕のリトル僕と、智のリトル智がその瞬間グニヤという破壊的な不快な感覚を伴い重なり合う。

「うわああああああああああああああああああああ！！！！！！」

僕と智の悲鳴もついでに重なり合う。お互いがお互いをはねのけて急いで立ち上がる。

「なんて事するんだよ智！僕の僕が気持ち悪さのあまり、こんなに縮こまっているじゃないか！」

「それはこっちのセリフだ！俺の俺もこんなに……。てかお前のお前は元々こんなもんじゃないか！」

「なんだと！いくら智とはいえ今のは聞き捨てならないな。起動時の大きさを勝負し……」

「待て！！！」

智が僕の言葉を遮る。

「もしかして智は僕の僕におしげづいたの？」

僕は勝ち誇ったような余裕の笑みを浮かべる。僕の僕の強大なカリスマ性を前にすれば仕方のないことだろう。

「断じて違うし、今はそれどころじゃないだろ。先ずはお互いの自分自身を消毒することが先決だ！このままじゃあ二人ともやばい。」
それを聞いて、僕の中にイナズマのような感覚が走った。

こいつできる。こんな時でも今一番必要なものが何か理解してやがる。僕の僕の名誉のことだけを考えていた自分が恥ずかしいぜ。僕は動揺していることを智に見透かされないように、いたって冷静な素振りをする。

「ちつ。智の言うことも一理あるな。ここはお互い鞘に収めよう。……つてぶぶぶ。今僕上手いこと言っちゃった。僕の僕を刀に例えるなんて。」

ふと智の方を見ると凄いジト目で僕のことを見ている。

「・・・ごっほん。でも消毒つたってどうやるのさ？僕消毒なんてしたことないからわからないよ。僕の僕を消毒するとなれば、キズドライを使うわけにもいかないし。」

僕は気を取り直して、急いで話を元に戻す。どうやら智も消毒をする方法まで考えては居なかったようで真剣な顔で考え込む。

「うーん。確かにキズドライを使って、俺の俺を黄色に染めるわけにはいかないし・・・。考えてみれば小さい頃から怪我しても唾を塗るだけだったしな。あつ！そう言えば『三国マサラ』で斬り付けられた宙備が酒をかけて消毒していた気がするぞ！！」

「それだ！さすが智！！ってそれこそどうやって入手するんだよ！未成年が集まる高校の寮に酒が置いてある訳がないじゃないか。」

一瞬智の妙案に関心しかけるが、スグに高校生が酒を入手する難しさを思い出す。

「たしか坂田の部屋に焼酎があつたはずだ。前に俺が寮監室に呼ばれて怒られていたとき部屋の端に置いてあるのを確かに見た。」

坂田とはこの寮に住むすべての生徒が震え上がる、鬼の寮父である。面倒見も良くて基本はいい人なんだけど怒らせれば大変なことになる。僕は怒り狂う坂田の姿を想像し、ゴクリとつばを飲み込む。それ以前にこういう学園モノには可愛いもしくは綺麗な寮母さんがつきものだというのに、もはや女でもないなんて。これに関しては、己の不運をただただ嘆き、涙を飲むしかない。

「くっ！それしかないか。そうと決まれば速く向かおう。」

怖がっているばかりでは、道は開けない。ここは眦を決して望む必要がある。

「そう焦るな。俺に考えがある。近くによれ。ここによここによ・・・」

誰もいないからこんなことする必要もないのに全裸で顔を寄せ合う汚らしい男二人がそこには居た。

*

コンコン

僕は恐る恐るといった様子で坂田の部屋の扉をノックした。覚悟を決めたとは言え自ら獅子の巢の中に入るのは勇気がいるものだ。横を見ると、智は全然平気といった様子で呑気な顔をしている。相変わらず太い野郎である。

「入れ。鍵は空いている。」

中から坂田の図太い声がする。この声を聞いただけで僕は曲がれ右して帰りたくなってしまふ。

「失礼します。」

しかし、智はハキハキとした口調でそう言うつと遠慮もなしにズカズカと坂田の部屋に入っていく。

「高山に松野か。こんな遅くにどうしたんだ。」

「はい。実は坂田先生に相談があつてきました。実は高山君に好きな人ができまして相談されたんですけど、ちょっと僕だけではどうにもこうにもいかないので人生経験が豊富な坂田先生にもと思ひまして。」

「ええええ！？何言つてんのサト、うわあああ！」

僕の手が後ろから捻り上げられた。相変わらず凄い力だ。

「なんだ、そういう話か。先生も明日の授業のこともあるし、そろそろ寝るつもりだったんだが仕方がない。話してみる。」

「ありがとうございます。実はこいつ由美子のことが好きなんです。」

「やだなあ・・・あああ！」

さらに強く手首をねじり上げられた。

おいおい、よりにもよつてあんな凶暴なバカの名前を出すとは。確かに由美子は足が綺麗で顔も悪くないし、胸だつて小ぶりとは言え綺麗な形をしているのが服の上からでもわかる・・・ってほぼ外見は完璧ではないか！？

「まあ良い。立ち話もなんだから靴を脱いで座れ。」
しばらくの間捏造された僕の恋の話が淡々と続いた。それも智の口から。僕は何度も否定しようとしたんだけど、その都度力いっぱい手を捻り上げられてどうすることもできなかった。

少しすると坂田の顔色が段々と悪くなってきた。これは僕の恋バナが気持ち悪するものだったからでは無く、智の能力が効いてきた証拠である。僕の作り上げられた薄っぺらな恋の話がマンネリ化をみせ停滞してきた丁度その頃に坂田は、

「ちよつと悪いな。トイレに行かせてもらおう。」

と申し訳そうに言うと言席を外し、トイレに駆け込んだ。

「智の能力が効いてるんだね。じゃあ早速持つて帰ろうか。」
智の能力はビフィズス菌の活性化。ある程度相手の近くに寄らないと発動させることができないが、この力を受けたやつはヨーグルトを食ったかのようにトイレにいかざるを得なくなる。

本当に恐ろしい能力だ。敵に回さないようにしなくちゃな。

僕はトイレに駆け込んでいった坂田の顔色を思い出して、その能力の強力さに身震いせざるを得なかった。

「おい、お前はさつき何を聞いてたんだ。このまま俺たちがいなくなったら焼酎を盗んだ犯人がまるわかりだろ。ここでお前の能力を使うんだよ。」

智が呆れた表情をしてこちらを見ている。そう言えば風呂場で作戦会議をしたとき何か言ってたな。

「あつ、そつか！智は本当に頭が良いね。」

「お前が悪すぎるんだよ。」

智はやれやれといった風に両手を広げる。そんな目をしないでくれよ。これではまるで僕がバカみたいじゃないか。

僕が焼酎に手を当てるとまばゆい光が溢れ出す。それから僕はゆつくりと元あった場所にボトルを戻した。

「おう、お前たち待たせたな。」

タイミングよく坂田が戻ってくる。

「坂田先生。高山も先生と話してスッキリしたみたいなんで、今日はもう帰ります。明日の授業で寝ちゃったら元も子もないですね。」

「おお、そうだな。何かあればいつでも来いよ。」

坂田は豪快な笑顔でそう言うと、僕らを入口まで送ってくれた。腹に潜んでいたモンスターをパージさせて晴れやかな気持ちになっているみたいだ。こんなに気持ちのいいやつを騙すなんて気がひけるなあ。

「先生、今日は本当にありがとうございました。あつ。そう言えばあそこにある焼酎凄く高そうですね。」

どうやら僕たちが帰るときには、焼酎はまだあったという印象を坂田に植え付けるつもりみたいだ。本当に恐ろしい奴。

「ああ。実はあれは上等な焼酎で一本数万円もするんだ。何か特別なことがあった日とかに少しづつ飲んでるんだ。」

ああ。なんか嫌な情報聞いちゃったな。焼酎も僕等の僕等を消毒するために作られたわけではないというのに。

「そうなんですか。どうりで重厚なビンに入っているわけですね。では本日は失礼します。」

そう言っ僕達は坂田の部屋を後にした。

*

僕達は寮の真裏にある大きな公園のトイレに急いだ。もし寮で僕達の僕達を洗浄しているところを誰かに見られたらなんの言い訳もできない。その点への配慮も僕達レベルになれば抜かりないのだ。

公園のブランコに腰掛けて待つこと数分、ミニチュアサイズのネクタイを頭に巻いたスーツのオジサンが千鳥足でこちらに向かつて歩いて来た。なんで僕は何を擬人化してもオジサンばかりなのだろう。まあしかし、擬人化する物が酒ならオジサンになってしまっても仕方のないことだ。僕はそう気を取り直すと、オジサンに話しか

ける。

「わざわざ公園まで来てもらって悪いね。ご苦労さま。」

「ワシもう消えてもいい？もううちに帰って水飲んで寝たい。」

「酔っているところ悪かったね。消えてくれて構わないよ。」

本当は一定時間の間、自分の意思でキャラを消せないんだけど、そいつの意思と僕の意思が合致した時だけは時間に達していなくても消すことができるんだ。

ボン！という音がして、オジサンが跡形もなく消え去る。先程までオジサンが立っていたその場所には一本の焼酎が転がっているだけである。物わかりがいい奴で本当に助かった。僕らは一刻を争う事態なのだから。

「智、でもどうやってかけるの？このままだとズボンとパンツまでビチャビチャに濡れちゃうよ。」

「ふん。そのへん抜かないわ！」

智は渾身のドヤ顔でそう言つと、おもむろにポケットから紙コップを取り出した。なんてムカツク顔なんだ。僕は思わず嫌悪感に任せて殴りつけたい気持ちになるがなんとか耐える。今はこんなところで仲間割れしている場合じゃないんだ。

「そんな事もあるつかと、坂田の部屋から掻払っておいた。」
そう言つと智はそのコップにトクトクと焼酎を注いで僕に一つ渡した。

「これに漬け込めば大丈夫。お互い個室に入つて消毒しちやおう。」

「さっさと終わらせて寝るぞ。」

「ああ、そうだね。お互い武運を。」

そう言つて僕らは別れた。

個室に入ると僕は急いでズボンを下ろし、僕の僕をゆっくりと焼酎に漬け込んだ。

うん、なんだか本当に消毒できてるみたいだ。なんだか僕の中から熱が発しられている気がする。

消毒を終えると僕達はさっさと個室から出た。うんこをする場所

に長居は無用である。少し頭がボワボワするが風邪でも引いたの
あろうか。

「おい、お前顔が赤いぞ。」

「何を言ってるんだよ智。君の方こそ真っ赤だよ。まあいいか。な
んだか水を飲んで眠りたい気分だからさっさと帰ろう。」

「ああ、そうだな。」

僕達は力なくトボトボと夜道を寮に向かって歩き出す。

公園の角を曲がり、寮前の大通りを泣き出したような惨めな気持
ちで力なく俯いて歩いてしていると、不意に強力な明かりが僕たちを照
らし出した。

「君たちこんな遅くまで何してんの？って顔真っ赤じゃないか。君
たちお酒飲んでるでしょ！！」

あつ、お巡りさんだ。でも大丈夫。一滴も酒飲んでないし、何の
問題もない。早く状況を説明して部屋に帰ろう。

「いいえ。飲んでません。一滴たりとも。」

本当に飲んでないので自信をもって、そう言える。

「こんなに赤くなってるのに飲んでないって言われてもねえ。とに
かくちよつと署まできてもらえるかな。」

その晩トイレに床を立った寮生のK氏は闇夜に響きわたる『飲ん
でません。つけてただけです』という2人の男の声を確かに聞いた
という。

今思えばお巡りさんが僕たちの言葉を信じてくれなくて本当に良
かったと思う。そうでなければ補導される以上に、大切な何かを失
っていたことだろう。仕方ない。甘んじて受けようではないか。謹
慎3日ぐらいどうってことないさ。

そのあと僕たちはインターネットで粘膜からもアルコールを摂取
できることを知った。少しだけ大人になれた気がした、そんな高一
の夜。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7693x/>

特高特科

2011年11月11日17時03分発行